



戦後70年以上語られなかった 陸軍中野学校の「秘密戦」、 明らかにするのは過去の沖縄戦の 全貌だけではない。

第二次世界大戦末期、米軍が上陸し、民間人を含む20万人余りが死亡した沖縄戦。第32軍・牛島満司令官が降伏する1945年6月23日までが「表の戦争」なら、北部ではゲリラ戦やスパイ戦など「裏の戦争」が続いた。作戦に動員され、銃を持ち故郷の山に籠って米兵たちを翻弄したのは、まだ10代半ばの少年たち。彼らを「護郷隊」として組織し、「秘密戦」のスキルを仕込んだのが日本軍の特務機関、あの「陸軍中野学校」出身のエリート青年将校たちだった。

1944年の晩夏、大本営が下した遊撃隊の編成命令を受け、42名の「陸軍中野学校」出身者が沖縄に渡った。ある者は偽名を使い、学校の教員として離島に配置された。身分を隠し、沖縄の各地に潜伏していた彼らの真の狙いとは。そして彼らもたらした惨劇とは……。



「散れ」と囁くソメイヨシノ
「生きる」と叫ぶカンヒザクラ

長期かつ緻密な取材で本作を作り上げたのは二人のジャーナリスト。映画「標的の村」「戦場ぬ止み」「標的の島 風かたか」で現代の闘いを描き続ける三上智恵と、学生時代から八重山諸島の戦争被害の取材を続けてきた若き俊英、大矢英代。

少年ゲリラ兵、革命による強制移住とマラリア地獄、やがて始まるスパイ虐殺……。戦後70年以上語られることのなかった「秘密戦」の数々が一本の線で繋がるとき、明らかにするのは過去の沖縄戦の全貌だけではない。映画は、まさに今、南西諸島が進められている自衛隊増強とミサイル基地配備、さらに日本軍の残滓を孕んだままの「自衛隊法」や「野外令」「特定秘密保護法」の危険性へと深く斬り込んでいく。

睨みました！
僕ら日本人は、あの日本の戦争に就いて、未だ未だ何も知らない、知らされていない、知らぬ事は罪。これは日本人、否世界の人間共にとって、必見の一作!! 立派な作業に、頭を垂れます。目醒めよ!

大林宣彦 (映画作家)

あの戦争は、地続きだった。沖縄と、本土と。過去と、今と。それを断絶しているのは意図的に作られた壁か、それとも無関心という薄なのか。背を向ければ、再び地獄は忍び寄る。生き抜いた人々の声は、私たちへの警鐘そのものだった。

安田菜津紀 (フォトジャーナリスト)



@spysenshi fb.com/spy.senshi www.spy-senshi.com

とき／2019年1月25日(金) 18:00~20:00 (開場17:30)
ところ／札幌プラザ2・5 (札幌市中央区南2条西5丁目 狸小路5丁目アーケード内)
入場／無料 (先着順) ※事前申込み不要。当日、直接会場へお越しください。
問い合わせ／北海道平和運動フォーラム TEL (011) 231 - 4157